

直田比雷丞

穗向屋藏板翻刻



11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

No 49457 / 23

直日靈瑞書

此書の名直日靈とつけられたるの古事記の上つ巻よかれ伊豆國  
 岐大神詔たまひつらく吾の伊那志許米しこめさ穢さ國よ到りて  
 吾の御身の禊爲などのり給ひて云々初て中瀬一降加  
 津日神此二神の穢さまき國よ到りはし、時の汚垢よ因て成ませ  
 る神なり次よその禍を直さむとして成ませる神れ御名は神直毘  
 神次に大直毘神次よ伊豆能賣神云々とあるよよられたるあり又  
 大殿祭御門祭道饗祭等の祝詞に見えたる事をも見あはせてある  
 べきなりかれ此書ハ外國の書學ぶことこの傳り來て世の人漢籍意  
 に相麻自許利相口會てその禍事よ汚るを禊ひ清めて本つ大道  
 よ直さしむる教の書にちもあるよ、よ伊豆國君澤郡熊坂の里人

竹村茂雄の寛政の七年といふとしわが鈴屋翁のをしへ子となりてまづ歌學びよ心いれて年ごろ經るほどよ中昔の世の雅情を志りみやびごころを知ての物の価はれをしるといふことをもしり又人として人の道を志らずてのあるべからざるよしをも志りていやはなびよまなびいやまよまよみて奈良の御代よりをちつかた遠天皇の御代この御典および神世の古事にいたるはでそのあるべふみよよりてあきらめゆもとよりかたらふりの里のうがら友だちのさらよもいはず猶をちあちの人とを便にゆけて言問かわしつゝ善き道にいざなふまよま同じ志に心よせ學ぶ人よれほくなりもてゆくをうむがしみうれしみ思ふに思ひけらくのあはれゆくのはに此人のよろおび心さを此古よと學びをや廣き世の中にいまたしらすしてあるなるもあるのうれ

とさことよあけくれ下なやみわたりていかよしてあは此ねぎことえかなひなむと思ひめぐらすの中にわが大人の著はし給へる書よそこをくあれども皇大御國の道の本を佐太加爾牟俱佐加に直く正しく言擧して諭し給へる其は下めの書よ直毘靈よりあれ我等りのかみ此教によりてかくのおとくこり志の發しつれ此書よしよいとはやく古事記傳の首卷よ道といふよとの論ひとそりてその其書よつきたる序文か何ぞれ如くおぼえて其書よむ人のよむめれどもよとさらに一つの尊き諭し書ぞといしらすてまぐすなるもあるめるのいさをほろしき事なりおれいかで別摺卷となして世の人よあまねく示し讀しめを志を起してまよとの道によらぬ人なくやあらまよと思ひよりておのがもとよ言通えす便につけてまよなもいひおよせけれをまよその志を伊登保志み伊

加志み思ひてそいいと善き事なりよくあそ思ひよらせられたといひてわが翁のうるはしくおられたる一卷おのれ秘もたりけるを此人にゆづりあたへければいたくよろおほひてかく板にゑらせたるになもあるまゝをもて此ゆゑよし記して此書のはしおみとす辞別て此書よみて諾なはぬ人よいふおのふみゑるし出られてより五十年あまり五年をなも経ぬれ今しくの世にあやふ人もあらじと思ふ物からもし百人が中に一人も漢意をぞあらぬ人あらむよは葛花といふ書を引あはせて見まさまへてばあやしと思ふけしうたが故しとおもふけしもとけぬべしまた玉匣玉銚百首さてハ宇比山踏といふをもよむべしつぎにハ玉勝間の巻くに學びの諭おと道の教へおとをらるおられたる條々に心とめて見む人の其うたがひとけずてやはあるべきのくて今

さらよいはむも事あらたしくのあれど事につぎてよいふおが翁のあらはしおられたるが中よはもともたふとき書ハ古事記傳取戎慨言歴朝詞解おれの三部ハ我學の友の底寶御寶主と頂よ捧持て辱み尊み宇牟迦斯み思ふ書なりをハ倭魂かたゝ古まど學ひいそむ人ぞよく知悉きまのいろしむ人の出來む事をしねぎ思ふとして此直日靈ハかくなも世よぼどころすよハありける朝ハ御霧夕の御霧を朝風夕風の吹拂事の如く落多支都速川の瀬に降立滌さ清めたる事の如く天下四方ハ國よハ狂々しき漢意も忌々しき佛意も除らぬえなく清々しき倭心の彌高に彌廣にみちとらひなむ時のいたらむなも直毘大神の靈幸ハ賜ハ助け賜ふゑるしよは有べきあなたふとあなかしこかくいふを此翁のをしへ子にしてやがて此家つぎて紀の殿に仕奉る本居太平文政八

年といふ年の二月の十日あまり七日の日恐み恐みもあるき

直日靈

皇大御國の掛まくも可畏き神祖天照大御神の御生坐る大御國よ

として 萬國に勝れたる所泊の先まゝにひちじる一國を 大御神大御手よ天つ

靈を捧持して 御代御代に御あまると傳 萬千秋の長秋に吾御子のま

ろとめをむ國なりとまるとよとして賜へりこまよく

動かぬこと既に 天雲のむのふすかぎり谷蟻のさわたるきはみ皇

御孫命の大御食國とさたまひて天下にあらぶる神もなくまつ

ろはぬ人もなく 御代の間にたまくも不伏惡穢奴もあれば神代の古事のまに

大御稜威をかややかしてた ちまちにうち滅し給ふ物を 千萬御世の御末の御代まで天皇命のしも

大御神の御子とましくて 御世御世の天皇のすなひち天照大御神子にあ

せり天つ神の御心を大御心として 何わざも己命の御心もてかかしたち賜

ひたまひ治め賜ひて疑ひおもはず事あるを  
 りの御事もて天神の御心を問して物給ふ神代も今もへだてなく天津  
 日嗣の然ましますのみならし臣連八十伴緒にひたるまで氏かべねを重みして子孫  
 の八十續その家々の職業をうけつがひつゝ、祖神たちに異ならず只一世の如くに  
 て神代のまゝ、神ながら安國と平けく所知看しける大御國よなもあ  
 りけれを書紀の難波長柄朝廷御卷に惟神者謂隨神道亦自有神道也とあるをよ  
 く思ふべし神道に隨ふとは天下治め賜ふ御しとぞいたゞ神代より有こ  
 しまに物賜ひていさゝも御がしらを加へ給ふことなきをいふさてしか神  
 代のまに、大らのに所知看せばおのづから神の道をたうひて他にもとむべきこ  
 となきを自有神道といふなりけりかれ現御神と大八洲國しろめすと申すも  
 其御世々々の天皇の御政やがて神の御政なる意なり萬葉集の哥あどに神隨云云と  
 あるも同じところぞ御國と韓古の大御世にの道といふ言擧もさらにな  
 かりき故古語にあしらの水穂の國  
 其はたゞ物よゆく道と有りけれ美  
 知の古事記に味御路と書る如く山路野路などの路に御てを言を添たるにてだゞ物  
 にゆく路ぞまればおきての上つ代物のみとわりあるべきすべ萬の教へ  
 おとをこも何の道くれの道といふとは異國のよたなり異國の天  
 照大御神

の御國にあらざるが故に定まれるまなくして狭蠅なす神とやろを得てあらぶるに  
 よりて人心あしくあらはしむたりがはしくして國をとり取つれを賤しき奴もたちま  
 ちに君ともなれを上とある人下ある人に奪はれじとかまへ下なるは上のひまを  
 うのがいてうむとむむはかりてかたみに仇みつゝ古より國治まりがたくなも有け  
 る其が中に威力あり智り深くて人をなつて人の國を奪ひ取て又人にうばるまじ  
 き事景をよくしてしばゝ國をよく治めて後の法ともあしたる人をもろことに  
 聖人ぞ云なるたゞへば乱れたる世に戦にならふおへにおのづから名將おほく  
 いでくるが如く國の風俗あしくして治まりがたきをあながちに治めんとするのら  
 世々にそのとををまゝ思ひめぐらし爲ならひたるも悉に一のかしこき人とも  
 りいできつるなり然るをこの聖人といふもの神のこよによにすぐれておのづ  
 からに奇しき徳あるものと思ふひがことありきて其聖人とも作りおまへて定  
 めおきつるもとをなも道といふあるのればかるくして道と云物も其旨を  
 きいむればたゞ人の國をうばく人がためと人に奪るまじきまへとの二に、次  
 ぎにむれもあるそも、人の國をうむひ取むとあるに、よろず心にくだき身を  
 くるしめつゝ善ことのかぎりをして諸人をなつけたる故に聖人のまことに善人め  
 きて聞む又その作りおたつる道のさまもうるはしくよるすにたらひて米でたくの  
 見ゆめれともまず已からうの道に背きて君をほろぼし國をうばへるものには、われ  
 ばみないつかりにてまことよき人にあらじいせもいとも悪き人ありけりもとよ  
 りしか穢悪き心もて作りて人をあざむく道なる氣にや後の人もたゞうのべころた  
 ふとみしたるがひがほにもてあすめれとまことに一人も守りつとむる人なれば  
 國のたすけとあることもあく其の名のみひろてつひに世に行はるゝことなく  
 て聖人の道はたゞいたづらに人をうらむる世々の儒者ともものさへづりぐさぞあれ

りけり然るに儒者のたゞ六經を以て書をもとらへて彼國をしも道正しき國ぞ  
といひの、しるひいたくたがへるこぞなりかく道といふもとを作りて正さハもと  
道の正しからぬが故のわざなるをへりてたけきことに思ひいふところをこゝれろ  
も後人此道のまゝに行なへばこゝろあらめざる人ばよよに一人だに有がたきもとい  
かの國の世々の史をも見てもしるべき物をやきて其道といふ物のさまといふなる  
ぞやいへば仁義禮讓孝悌忠信をいふこちよき名どもをくぞく作り設て人をさ  
びしく教へおもむけむとぞすなるを後世の法律を先王の道にそむけりて儒  
者のいふしれども先王の道も古の法律なるものをやまた易なといふ物をさへ作りて  
いともこゝろふのげにいひなして天地の理をきめつくりたりと思ふよまれのた  
世人をなづけ治めむためのたをのり事ぞそもく天地のこぞありしもすべて神  
の御所爲にしていともく妙に奇しく靈しき物にしあればさらば人にのたごりある  
智りもてい測りがたきわざなるをいかでかよくきめつくりして知ることのあらむ  
然るに聖人のいへる言をハ何ぞもたゞ理の至極と信たふとみざるまういと思な  
れかくてその聖人どものいわざにならひて後世の人ども、よろずのことをも己が  
さりもておしはかりてとぞするぞ彼國のくせなる大御國の物學びせむ人はよく心  
得をりておめらる人の説になまそいされそすへて彼國の事毎にあまりこまらに心  
を著てのにかくに論ひぎだむる故になべて人の心さうしだち悪くなりて中々に事  
をしこころのしつ、いよ、國ハ治まりがた久のみなりゆくめりされざ聖人の道は  
國を治めむために作りてかへりて國を乱すたねともなる物ぞすべし何れも大ら  
あにして事足ぬるもといさてあるよろよけれ故皇國の古をざる言痛き教も何もな  
かりしかと下が下までみだる、ことあく天下は穩に治まりて天津日嗣いや遠長に  
傳はり來坐りさればかの異國の名にならひていはゞ是ぞ上もあき優たる大さ道に

して實の道あるが故に道てふ言なく道てふこぞなけれと道ありありけりそをこ  
とくしくいひあぐると然らぬとのけぢめを思へ言舉せずとそあたし國のごとま  
ちたく言だつるもとあきを云なり譬バオも何もそぞれたる人といひ立ぬをなま  
くのわらものぞ返りていさ、かの事をもことしく言あげつ、ほこるめる如  
く漢國なとて道ともしきゆゑにのへりて道ともしきことをのみ云あへるなり儒者  
こゝをえらで皇國をしも道なしとかるしむるよ儒者のいしらは萬に漢を尊き  
物に思へる心はあほさも有なむを此方の物知人さるに是をねさとらずての道て  
かことある漢國をうらやみて強てこゝれも道ありとあらぬまどいもをいびつ、争  
ふいたとへば猿むもの人を見て毛なきぞとわらふを人の恥ておのれも毛はある物  
をといひてこまかなるをしひて求出て見せてあらうふが如し毛を無きが貴きをい  
しらぬ癡人のし  
見さにあらざや然るをや、降りて書籍といふ物渡參來て其を學び

よむ事始まりて後其國のてぶりをならひてや、萬のうへよまド  
へ用ひらるゝ御代になりて予大御國の古の大御てぶりをバ取別  
て神道といひなけけられたりけるうへの外國の道とよまがふゆ  
ゑに神といひ又その名を借りてまゝも道といひふなりけり  
神の道としもいふ所由  
を下につむらかにとくまかありて御代御代を經るまゝ、よいやます



くよその漢國からくにのてぶりまたひはねふこと盛さかになりもてゆきつ  
 つひよ天の下まろしめを大御政おほみももはら漢様からさまなりはて、  
 難波の長柄宮淡海の大津宮のほどに至りて天の下の御制度もみあ漢まになりきかく  
 て後の古の御てぶりのた、神事にのみ用ひ賜へり故後代までも神事にのみ皇國  
 のてぶりのあほのまれあほ青人草あをひこくの心はでぞ其意そのまごころにうつりにける 天皇尊の  
 ることおほきぞのし 心をせずして己おのれががせかしらご、  
 ろを心とせると漢心の移れるなり、さてこそ安やすけく平たいらけくて有來ありまし御國  
 のみだりぶはしき事いできつ、異國あたらくによや、似たるおとも後よの  
 はじりきよけれ 意行をよきこと、してならひまねべるら直く清かりし心  
 も行ひもみな穢悪くまがりもきて後ついにそのかの他國のきびしき道ならじてを治  
 まりがたきが如くなれるぞかしせる後のありさまを見て聖人の道あらじて國を  
 をさまりざたき物ぞと思ふめるのしか治まりざたくなりぬるのものと聖人の道の蔽  
 なるまをばささならぬあり古の大御代に  
 其道をからずていとよく治まりしを思へ、そも、此天地あはつちのあひだよ有と  
 ある事ことの悉ことごとく皆神の御心なる中よ 凡て此世中の事の春秋の由きかはり  
 うへの吉凶き萬事みなことごとくに神の御所爲なりきて神に善もあり惡も有て所  
 行もそれにしたがふあれを大かた尋用のことわりを以てを測りがたきわざなり

か、然るを世人のしこきもをろかなるもをしなべて外國の道との説にのみ惑ひそ  
 て、此意をいらず皇國の學問する人など古書を見て必知べきわざなるをざる  
 人をもだににまきまへ知ざるをいふにぞや抑吉凶き萬の事をあだし國にて佛の道  
 への因縁と漢の道とにて天命をひひて天のなすわざと思へりこれらみなひがこ  
 ぎなりそが中に佛道説の多く世の學者のよく辨へつるまとなれを今いはは漢國の  
 天命の説のしこき人もみな惑ひていまだひがどあることをさされ人なけれ  
 ば今これを論ひざるを抑天命といふことば彼國にて古に君を滅し國を奪ひし聖  
 人の已が罪をのがれむためにかまへ出さる託言なりまことに天地ハ心ある物よ  
 あらざれを命あるべくもあらざるまこと天に心あり理もありて善人に國を與  
 へてよく治めしめむとならざる周の代のはてられたにも必又聖人の出ぬべきをさ  
 らざりしのかたにぞもし周公孔子にして既に道ハ備れる故に其後の聖人を出さず  
 といふも又心得ずかの孔丘の後其道あまねく世に行はれて國よく治まりたらむ  
 にこそぞもいはめ其後しよ、其道をすたれば、徒言となり國もまら、  
 れつる物を今えたりとして聖人をも出さず國の厄をまかへりみずつひに秦始皇  
 がおと荒ぶる人にしも與へて人草を苦しめ、はいるなる天のひがこ、ろぞいと  
 べけれぞろも暫にてもさる惡人にあたふべき理あらめもや又國をさる君のうへに  
 天命のあらば下なる諸人のうへにも善惡きしを見せて善人のながく福む惡人  
 を速く禍るべき理なるをあらはしてよき人も凶くも吉きたぐひ昔も  
 今も多かるいかにまこと天のしわざあらまじらばさるひがことばあらま  
 じやさて後世になりてのやうやく人心をかきよへに國を奪むて天命ぞといふを  
 ば世の人の諾なはねばうはは禪らせて取こともあるをばよらぬことといふを

れどかの古の聖人をも、實に是に異ならぬ物をや後世の王の天命をいふを信  
ぬもの、古人の天命をばまことと心得るはいなるまどひぞも古の天命ありて  
後にあきこころをのしけれ或人舜を堯が國をうばひ禹も又舜が國を奪へりとなり  
と云るもきも有べきまことぞ後世の王莽曹操がやもがらもうはへはつりを受て嗣  
つれども實の慕へるを以て思へば舜禹などもさぞありけむを上代を朴にして禪れ  
りと云あせるをまことと心得て國內の人をもみあざむかれにけらしの莽操が  
ころは世人をかしくてあざむかれざりし故に惡しむわざのあらわれけむかれら  
如くなる輩も上代ならましければあつた禍津日神の御心のあらびひもせむ  
それ聖人と仰がれあましものを 禍津日神の御心のあらびひもせむ  
すべふくひとも悲しきわざありける 世間物わしくぞこなひな  
いねらて邪なることも多るを皆此神の御心にして甚く荒び坐時を天照大御神  
高木大神の大御力にも御みかね賜かをりもあればまして人の力にまいるはともせ  
むそべなしかの善人も福り悪人も福あるたぐひ尋常の理にまゐる事の多るも皆  
此神の所爲なるを外國よと神代の正しき傳記なくして此所由をえしらざるが故に  
を以て定めむとするありいとをこかれ 然れども天照大御神高天原よ大坐  
坐て大御光のいせ、かも曇りまさし此世を御照しませし天津  
御璽はとほふればさす傳はり坐て事依し賜ひしまよく天の下  
の御孫命の所知食て 異國は本より主の定まれるがなけれはた、人もたちま  
ち王になり玉もたちまちたた人にもなり亡びうせも有

る古よりの風俗なりて國を取むと謀りてえとらざる者をけ賊といひて賤め  
くみ取得たる者を聖人といひて尊み仰ぐめりされいはゆる聖人た、賊の爲と  
げたる者にぞ有ける掛まくも可畏きや吾天皇尊はしも然るいやしき國の王もと  
等なみにの坐まささず此國を生成たまりし神祖命の御みづら授賜へる皇統に  
まし、天地の始より大御食國と定まりたる天下にして大御神の大命にも天皇  
悪く坐しませば莫まつろひとを詔たまはずあれば善く惡むも悪く坐むも側より  
うかいひをかり奉ることあたえず天地のあるきとみ月日の照す限なく萬代を經  
ても動き坐ね大君に坐せり故古語にも當代の天皇をしも神々申して實に神に坐  
ませば善惡き御うへの論ひをすて、ひたふるに畏み敬ひ奉仕ごまよの道に有  
ける然るを中ごろの世のみづらに此道に背きて畏くも大朝廷に射向て天皇尊を  
やまし奉れりし北條義時泰時又足利尊氏などが如きとあなかしこ天照日大御神の  
大御蔭をもおもひはからざる穢惡き賊奴どもありけるは禍津日神の心にあやしき  
物にて世の人のなびき従ひて子孫の末までしばらく榮む居しことよ抑此世を御照  
し坐ます天津日神を必たふとみ奉るべきことをしれとも天皇を必畏こみ奉るべ  
たことを心知らぬ奴もよにわりけるは漢籍意にまどひて彼國のみだりある風俗を  
あしこたに思ひて正しき皇國の道をいしらす今世を御照し坐します天津日神  
即天照大御神に坐ますことを信す今の天皇尊すあはち天照大御神の御子に坐ます  
ことを忘れぬ 天津日神の高御座の 天皇の御統を日嗣申す日神の御心を御  
たるにこそ 天津日神の高御座の 心として其御業を嗣坐が故あり又その御座  
を高御座と申す唯に高き山のみにあらず日神の御座あるが故なり日に高照  
とも高日とも日高とも申す古語のあるを思へさて日神の御座を次に受傳へ坐て  
其御座よ大坐ませ天皇命にまをす日神に等く坐こと決しかれば天津日神のおほ

みうつくしみを蒙らむ者の誰しの天皇あめつら命みことに可畏み敬び尊みて奉仕らざらむ天地あめつちの共常盤ともとこ堅磐かきい動く世なき  
 そ此道の靈たまく奇く異國あたらしくの萬の道みち優すぐれて正ただしき高たかき貴たよこき徴しるしなりける  
 漢國かんこくを道みちてふことのあれども道みちのあき故ゆゑにもとよりみだりなるが世よにま  
 すく亂れ亂れて終には傍の國人わがくにに國くにのこころを奪はればはてぬ其その夷狄えいてきと云て  
 卑劣ひれつつゝ人のおとも思慮しりらざりしものなれどもいさほひつよくて奪ひ取つれば  
 せむきべあく天子てんしといひて仰ぎ居るなるいともくあさましきありきまならず  
 やかくても儒者にうしやうをなほよき國くにと思ふらむ王わうのみならず大かた貴き賤き統すんをだま  
 らず周しゅうといひし代しろまでを封建てんけんの制せいとか云て此別このべつありしが如くなれどそれも王わうの統  
 りのれを下くだまでも共ともにかへりつればまことば別べつなし秦しんよりこなたといよく此道このみちた  
 らずみだりにして賤せんき奴ぬの女にも君きみの寵ちゆうのまにく忽たちに后こうの位ゐにのぼり王わうの女にをも  
 すぢなる男おとこにあそきて恥ちとも思慮しりらず又昨日あふまで山さん賤せんなりし者ものも今日けふにそかに  
 國くにの政せいとる高官こうかんにもなり登のぼるたくひ凡たゞて貴賤きせんき品しんをたまらず鳥獸ちゆうぶつのありきまに異  
 ならずなるなりるも此道このみちはいかなる道みちぞと尋たづぬるよ天地あめつちのおのづから  
 なる道みちにもあらずは是こゝをよく辨別べんべつてゐる漢國かんこくの老莊らうしやう  
 などが見みとひつな思しひまがへそ人ひとの作つくれる道みちにもあ  
 らず此道このみちのかたも可畏おそきや高御産巢たかみけうす日神ひかみの御靈みたまよよりて世よの中ちゆうにあ  
 物ものも皆みな悉しつに此大神このおほいさまの神祖伊邪那岐大神いざなぎ伊邪那美大神いざなみの始め賜たまひて中ちゆう  
 世よに

にあらゆる事も物も此 二柱大神ふたはしらより始はじめまれり天照大御神あまてらすに受うたまひたもちたまひ傳つたへ賜たまふ  
 道みちなり故ゆゑ是以こゝ神かみの道みちと申まをすぞか 神かみの道みちと申まをす名なと書紀しよきの石村池邊いしむらゐ  
 其そのを只神ただかみをいつき祭まつりたまふまをさして云いふなりさて難波長柄宮なんばながへの御卷みまきに惟神ただかみ  
 者もの謂い下隨くだら神道かみちに亦また自有みづか神道かみち也なりとあるぞままさしく皇國みくにの道みちを廣ひろくさしていへる  
 始はじめなりけるを其由そのよしの上のうへに引ひいていへるが如ごとくなれば其道そのみちといひてことなる行なひの  
 あるにあらざればたゞ神かみをいつき祭まつりたまふことをいはいはむもいひもておけば  
 一ひとむねにあたり然しかるをからぶみに聖人設せいじん神道かみちといふ言ことあるを取とて此方このあたにも名  
 けたりとといふめるのこころらぬみだり言ことなり其故そのゆゑはまづ神かみとさすもの  
 此このと彼そのと始はじめより同じからずかの國くににしていはいはゆる天地陰陽てんちいんやうの不側ふせうく靈たまきをさし  
 ていふめればたゞ空そらき理ことのみにしてたしかに其物そのものあるにあらざると皇國みくにの神かみの今  
 の現いまに御宇みま天皇てんかうの皇祖かうそに坐ましてさらにかの空そらき理ことをいふ類たぐひにあらざればの漢  
 籍せきある神道かみちは不側ふせうくわやしき道みちといふことゝ皇國みくにの神道かみちを皇祖かうそ神かみの始め賜たまひたも  
 ち賜たまふ道みちといふことにて 其意そのいいたく異なるをや さて其道そのみちの意いの古事記こことぎを始め諸もろ古書こしよをも  
 をよく味あじひみれを今もいふとよくあらるゝを世よのものありびと  
 どもの心こゝろもみな禍津日神わざはひひかみよまじありてたゞのらぶみにのみ惑まどひ  
 て思おもひとおもひいひといふととらふみな佛ほとけと漢かんとの意いにしてまこ

この道のまゝをわすれさせずならざるもある 古の道といふ言擧なりし故に古書どもにつゆばかりも道  
 こしき意も語も見む故舎人親王を始め奉て世々の識者ども道の意をえとらへず  
 たゞの道としきこととちたく云るから書の説のみ心の底にしみ着て其を天地の  
 かのづからなる理と思居る故にすがると思ひねどもおのづからそれによつて  
 て彼方へのみ流れゆくめりされば異國の道を道の羽翼となるべき物と思ふも即其  
 心のかゝこへ奪はれつるなりけり大した漢國の説のかの陰陽乾坤などをばじめ諸  
 皆もと聖人どもの己が智をもてかゝるに作りかまへたる物なればうち聞にい  
 ことわり深げにさあめれども彼が垣内を離れて外よりよく見れば何ばかりのま  
 ともなく中々に淺はるなることいもなりかしをれども昔も今も世人の此垣内に迷入  
 て得離れぬこそくちをしけれ大御國の説の神代より傳へ來しまゝにしていざ  
 めも人のさかしらを加へざる故にうそをいいたゞ淺くを聞ゆれども實にいそひも  
 あく人の智の得側度ぬ深き妙なる理のこもれるを其意をわしらぬのかの漢國書の  
 垣内にまよひ居る故なり此をいではなれざらむほごいたとひ百年千年の力をつく  
 して物學ぶとも道のためには何の益もなきいたづらとざあらむかし但し古書のみな  
 漢文にうつして書たれば彼國のことども一わたりは知てあるべく文字のことどもま  
 らむためには漢籍をもいとまあれは學びつべし皇國 か 故おのが身 み に受行 うけやう  
 魂の定まりてたゞよぬうへにては害いそな物ぞ か 故おのが身 み に受行 うけやう  
 べき神道の教などいひてくゞものまなるもみなかの道との  
 をしへおとをうらやみて近き世よかまへ出 いで たるわたくしごとな

り ことおとしく秘説など云て人えりして密に傳ふる類など皆後世に偽造れる  
 ことぞ凡てよきことはいかにもく世に廣まるこそよけれ秘かくしてあま  
 ねく人に知せず己が私物にせむとす い  
 いとこゝろぎたあきわびなりかり あ なか あ 天皇の天下 あ ころ あ 先  
 す道を下 しも が下 しも として己 おれ がわたくしの物とぞむことよ 下なる者のか  
 たゞ上の御おもむけに従ひ居ること道にはかなへれたとひ神の道の行ひの別にあ  
 らむにても其を教へ學びて別に行ひたらむと上にしたがひぬ私事ならずや  
 人はみな産巢日神の御靈 みたま よりて生 うま れつるまに く 身 み 有べき  
 のぎりの行 な おのづから知てよく爲る物 よ あれば 世間に生とし  
 るまでも己が身のほ く に必あるべきかぎりのわざは産巢日神のみたまに頼て  
 かのづからよく知てなすものある中にも人の殊にすぐれたる物とうまれつれを又  
 一の勝れたるほどに あ ひて知べきかぎりのしりすべきかぎりのする物あるにい  
 めでか其上を あ ほ強るこそ の べらむ教によらずて い せぬものといは  
 人の鳥虫におどれり と やせむいはゆる仁義禮讓孝悌忠信のたぐひ皆人の必あるべ  
 きわざなれば あ るべき限を教を か らざれども お のづからよく知てなすことあるに  
 かの聖人の道 い も ま 治まりが た き國を し ひて を さめむとして 作 れる物にて 人 の必  
 有べき う ぎりを 過 て な ほ き び し く 教 へ た て む と さ る 強 事 な れ ば ま こと の 道 に か へ  
 えず故口 に 人 み な こ と い は し く 言 な が ら ま こ と に 然 行 ふ 人 の 世 に い と 有 が た  
 きを天理のま あ る道と思ふ い た く た が へ り 又 其 道 に う む け る 心 を 人 慾 と い ひ

てにくむもころぬずるもくろの人の慾といふ物のいづくよりいかなる故にてい  
 できつるぞそれも然るべき理にてまろの出来たるべければ人慾も即天理ならずや  
 又百世を経て同姓を婚すること由るを定むるも彼國にして上代より  
 然るにあらざる周の代のきだめなりきびしく定めたるもへ國の俗あしくし  
 て親子同母兄弟などの間にもみだりなる事のみ常多くて別なく治まりがたかりし  
 故なればか、る制のきびしきありて國の恥なるをやすべて何の上にも法の嚴  
 きを犯すもの、多きが由る故に其制の制を立しかどもまことの道にあらざ  
 りの情にかなはぬまとなる故にしたがふ人いとくまれなり後くはさらにもいは  
 ずはやく周の代のほどにすら諸侯といふ者のこれを破れるが多ければま  
 てつぎくらしられたり姉妹などにさへたいけし例もある物をや然るを儒者ども  
 の昔よりかく世人の守りゆへぬことをば忘れていたづらなるさだめのみをどらへ  
 てたけきことはいひ思ひ又皇國をしまひて賤しめむとしてともすれば古兄弟まぐ  
 ひをしこときひひ出て鳥獸のあるまひぞとそしるを此方の物知人たちも是をばま  
 りよのららず御國のあかぬことはいひてかたにひまぎらばいつ、いまださ  
 だに断り説ることなさいの聖人のさかしらるをならず當然理と思ひあづみ  
 てあほ彼にへつらふ心あるがゆゑなりもしへつらふこと、ろしなくば彼と同じから  
 ぬいかにごとのあらむ抑皇國の古いた同母兄弟をのみ嫌ひて異母の兄弟など御  
 合坐しこと天皇を始め奉ておほられたよのつねにして今京になりてのこなたまで  
 もすべて忌ことありき但し貴き賤きへだてらるるはく有ておのづからみだり  
 ならざりけりこれぞこの神祖の定め賜へる正しき眞の道なりける然るを後世に  
 うのから國のさだめをいざ、かばかり守るげにて異母なるをも兄弟と云て婚せぬ  
 ことにちと定まりぬるされば今世にして其を犯さむこそ悪からぬ古の定まり

にして論ふべきまよあらずいよへの大御代には志もがまもはでた、

天皇の大御心を心として 天皇の所思看御心のまに奉 命をかしまみ江やひはつろひておほみうつくしみの御蔭よかく

ろひておのもく 祖神を齋祭つ、 天皇の大御皇祖神の御前を拜祭坐が  
いづま 坐が如く下なる人ども、事にふれてを福を求む善神にこひねぎ禍をのがれむと  
いづま 悪神をも和め祭り又たましく身に罪穢もあれば穢清むるなごみな人の情よししてか  
いづま ならず有べきわざなり然るを心ごよまよとの道にかなひなごを云めるすぢと佛  
いづま の教へ儒の見にこそさることもあらめ神の道に甚くそむけり又異國にを神を祭  
いづま るにもたゞ理を先にしてさまく議論あり淫祀を云ていましむることもあるみ  
いづま ちきかしらなり凡て神を佛などいふある物の趣と異にして善神のみにとあらず  
いづま 悪きも有て心も所行も然ある物なれば悪きわざする人も福に善事する人も禍ること  
いづま とあるよのつねなりされを神と理の當不をもて思ひはるべきものにあらずた  
いづま その御怨を畏みてひたぶるにいつきまつるべきなりされば祭るにもそのこ、ろバ  
いづま へ有ていかにも其神の歡喜び坐べきわざをなも爲べきそまづ萬を齋忌清まはり  
いづま て穢惡あらせす堪たる限美好物多し獻り或の琴ひき笛ふき歌舞ひなごもろき  
いづま わざをして祭るまれみな神代の例にして古の道なり然るをたゞ心の至り至らぬを  
いづま のみいひて獻る物にもなす事にもからはぬ漢意のひがことありさて又神を祭

るに何わざよりも火を重く忌清むべきこと神代書の黄泉段を見て知べし是を  
 神事のみにもあらざ大かた常にもつつしむべく必みだりにをまじきわざなりも  
 火難る、とさへ福津日神とて得て荒び坐向へに世中に萬の福事をおこるぞの  
 しかれを世のため其のさ光にもあへて天下に火の穢を忌まほしきとさなり今の  
 代よと唯神事のをり又神の坐地などにおそかつぐも此忌を物すめられなべて然  
 る事せらになさ火の穢などいふをを思ふること、思ふなまさかしらなる漢意の  
 ひろされるなりかくて神御典を釋誨ふる世の識者たちすらた漢意の理  
 をのみうるさきまで物して此忌の説をしもなほざりにせめるといふにぞや  
 ほど  
 くにあるべきかぎりのわざをえて穩しく樂く世をわとらふは  
 かなかりしのを 又諸匠の物造るすべ其外よろづの伎藝などを教ふることに上  
 代よも有けむをの儒佛などの教事もいひもておけばこれらと異  
 なることあきに似たれどもよく辨されを同じのらざることをなりかし 今 はた其  
 道といひて別に教を受ておこなふべきわざをありなむや 然らば神  
 らくにの老莊が意にひとしきかど或人の疑ひ問へるに答へけらくかの老莊がども  
 は儒者のをのしらをうるをみて自然なるをたふとめばかのづから似たることあり  
 されどそれとも大御神の御國ならぬ惡國の生れてたゞ代々の聖人の説をのみ聞  
 れたるものなれを自然ありと思ふもなほ聖人の意のたのづからなるにこそあれよ  
 ろづの事は神の御心より出ての御所爲なること  
 とをしもいしらねば大旨の甚くたが危る物をや もしをひて求むとあらむ

きたなきからぶみご、ろを積ひさよめて清くしき御國お、ろも  
 て古典どもをよく學びてよ然せば受行べき道なきことわれのゆ  
 らら知てむ其をさるすすなはち神の道をうけおこなふよあり  
 けるのかれば如此まで論ふも道の意はあらねども禍津日神の  
 みまわさ見つ、黙止にあらざ神直毘神大直毘神の御靈たをりて  
 みのまがをもて直さむとすよ 上の件すべて己が私のこともていふに  
 に見む人を疑はじ、のくいふ、明和の八年といふとこののみな月の九  
 日の日伊勢國飯高郡の御民平阿曾美宣長のことのみよしまみもま  
 るぞ

後かき

おほけなくもおのれ波やくよりおもひけらく此直毘靈のわの  
 國の道はさへるをつはらかよとさきめされたる書なれ此ふみ  
 よくよみて道意をうまくさとりうるどきのおのつからふさを  
 からぬからこころのそまりいかしきやまとたましひかたまりて  
 皇御國のうへもなく尊きゆゑよしのしらるゝわさなれひらく  
 世の人にみせて御國の大道を日よさかゆかし先まほしきと  
 よこそとおもひこたりけるを此度いかなる神のさきはひよか故  
 大人のみつあらかよせたまへる直日靈をしも藤垣内翁のおのれ  
 にゆけりあさへたはひけれのよろこびながら翁の序ふひをへて  
 板よえらさて世の書よむ人よよおくらんとすいかてふみよむひ  
 とくよの書よくよみてさても猶いふかしくおほゆるふしも  
 はしら翁のいはれたるよとく葛花に玉くしけ玉はあろぞ解な  
 とあはせみてよく考めくらしてよさらのうたかひの清くと  
 けてわか國の道の萬國よすぐれてめてたく此書のみよとに尊き  
 よと眞まみのか、みに花かひらをうつせるかよとくあさらかに

みえつへし猶何くれのよまやかなるよどの翁の序よくはしくし  
 るしたまへれいよよのみなもらしつ

文政八年春

伊豆國熊坂村民 竹村茂雄

明治三十三年七月廿四日印刷  
全 年七月廿六日翻刻出版

定價金三錢

伊豆國君澤郡修繕寺村大字熊坂

原 版 者 竹 村 茂 正

東京市日本橋區村松町五番地寄留

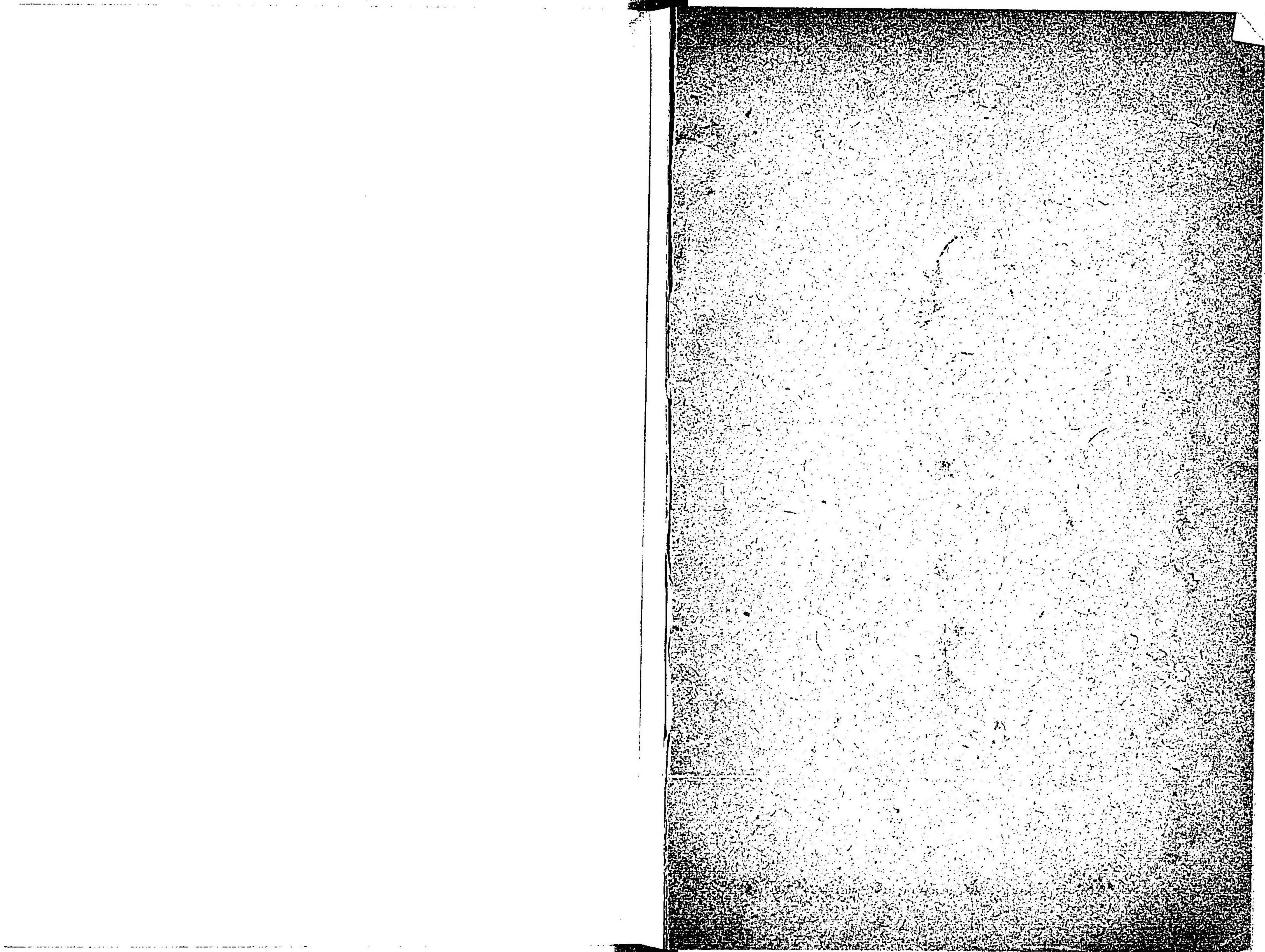
翻 刻 者 田 中 正 太 郎

全 市 全 區久松町骨番地

印 刷 者 劍 持 定 兵 衛







1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10

特 5 1

3 3 5

直日靈

国立国会図書館

0 1 4 4 7 7 - 0 0 0 - 5

特 5 1 - 3 3 5

直日靈

本居 宣長 / 著

M 2 3

A B B - 0 8 5 5



特 5 1